

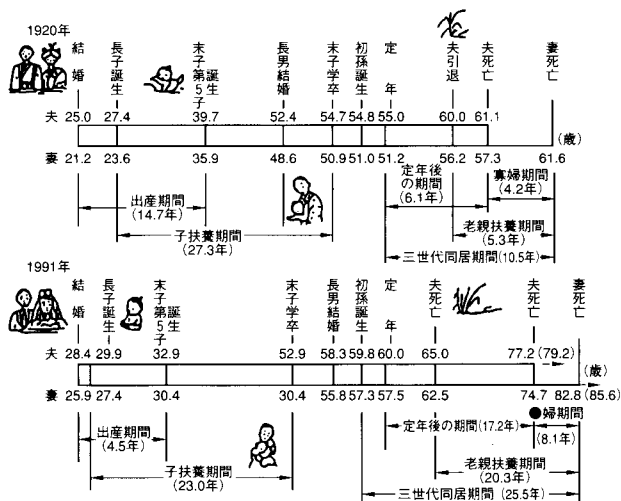
家族関係演習における保育体験実習の意義

竹田 美知

1. はじめに

一人の女性が生涯に生む子どもの数を推計する合計特殊出生率は低下の一途をたどっているが、その原因は有配偶女性の子どもの数減少ではなく、婚姻率の低下にあるといわれている。1995年国勢調査によると未婚者の割合が、女性は25歳～29歳代で49%男性の30歳代～34歳男性で未婚率が37.3%と高くなっている。未婚者の増加はこれまでの結婚→出産というライフコースを多様化させた。一子子どもを持たないライフコースの増加である。また、一生未婚でなくても、晩婚化によって子ども数が減少し子どもと共に暮らす期間が短縮した。しかし子ども一人一人の自立年齢が延長し、別居して離家後も親としての役割を果たす時期は続いている。ゆえに子どもが自立し別居しても生殖家族の親としての役割を果たす期間は、平均寿命の伸びとともに延長していると言えよう。一方、平均寿命の伸びは老親との関わりを体験する期間を延長した。家族役割からすると定位家族としての子としての役割遂行期間は延長したと言える(図1)。ただ、老親と同居して家族役割を果たすケースは減少し、別居して子としての役割を果たすケースが増加してきている。

図1 ライフサイクルの変化



- (注) 1 大正期は大正9年前後のデータから作成。
 2 出生間隔はコーホート・データ、他はすべてクロス・セクション・データ
 3 夫婦の死亡年齢は、各々の平均初婚時の平均年齢を加えて算出している。ため、たとえばモデルの夫婦期間は、実際に夫と死別した妻のそれとは異なることに注意する必要がある。
 4 現在(平成3年)の夫と妻のライフサイクルの点線部分は、平成37(2025)年における夫婦の推計死亡年齢に示す。

以上のことからライフコースにおける変化から考察すると、同居しながら親子という地位関係で家族役割を果たす期間は短縮しているが、別居して役割を果たす期間は延長しているといえる。子育て後の親としての子との関わり、離家後の子としての親への関わり、すなわち成人後の親子関係が現在のライフコースでは長い期間をしめるようになっている。一方出産児数の減少は兄弟・姉妹関係を体験する機会を減らし、しかも第2子との年齢差があまりないことは親の子育て期を目にしたり年長者として援助する機会も減少している。このように乳幼児と親との関わり、すなわち身体的能力や精神的発達段階の異なる異世代との交流を第3者として観察、参加する機会はますます現在のライフコースでは減っているといえる。

核家族世帯、単独世帯の増加は地域社会における家族の孤立や匿名性が問題にされて久しい。近隣関係の希薄化は家族を包容する地域社会の一員として子どもの関わるの機会を減少させている。家族役割を超えて地域の一員として他の家族の子どもや高齢者との関わりは、自分自身の家族役割を外から見つめ再考する機会となりうるがその機会は失われている。このことは、また自分自身がある家族集団の一員として認識されていることを自覚できる機会の減少も意味している。自然紐帯で結ばれた地域社会の人間関係から得られる様々な対人関係能力は、これまでの家族関係に大きな影響を及ぼしていた。地域の異年齢集団で遊ぶ中で小さい子へのいたわりや幼児へのコミュニケーションのとり方を学ぶこともできた。また近隣に住む友達から聞く話の中にいろいろな育児法を垣間見することも可能であった。何よりも様々な家族の有り様、経済状態や家風、家族関係も含めて多様なライフスタイルを垣間見ることができた。地域社会の変容は多かれ少なかれ地域社会によって育まれる役割を変容させ、新しい地域関係に基づく家族のあり方が模索されていると言えよう。

少子化、晩婚化がこれまでの社会構造を揺るがし、特に社会保障の面で大きな問題を与えていると問題にされている。少子化、晩婚化は個人が多様なライフコースの中から選択した結果であるが、個人の選択に社会情勢が大きく影響する。高学歴社会到来後の女性の社会進出、子ども一人にかかる経済的負担の増加によって個人（特に女性）が職業役割と家族役割との二重拘束によって重荷を背負い、少子化、晩婚化といった選択を余儀なくされている状況に着目して様々な試みがなされている。男女共同参画社会の実現によって少子化、晩婚化へ歯止めをかけようとする試みもその1つである。しかしそうした性別役割意識の意識変革とともに地域においても家族においても変容した異世代交流に対応した役割取得が行われなければ意味がない。結婚後・出産後の家族役割に対する理解や役割調整を学ぶことも大切であるが、家庭を持つかどうか、子どもを持つかどうかという選択にはこれまで自分自身が所属してきた定住家族における家族関係とそれを取り巻く地域社会における異世代交流がどのようなものであったかということが大きく関わってくる。例えば兄弟数

の減少や地域のピアグループの崩壊によって、自分より年下の子とも接した経験がないことは、自分自身が『子ども』を持つことに不安を生じさせる。このような異世代に対する理解を深める体験学習は、生活設計を始める年齢にとっては不可欠のものである。本報告は、異世代交流学習の中でも特に保育学習に焦点をしばり第1に発達段階に即した保育学習カリキュラムを家庭科の歴史においてとらえ、第2に新教育過程の改善における保育体験学習の位置づけを概括し、第3に本学における家族関係学演習における保育体験学習の意義を考える。

2. 家庭科における保育学習の歴史

1947年の最初の学習指導要領によると、家庭科の指導目標として、中学校で「乳幼児の生活を理解し、やさしく世話することの出来る能力を身につける」としており、また高等学校では「授乳、離乳の正しい方法の理解」や「妊娠・出産の正しい知識」などがあった。

1970年の学習指導要領では、高等学校の家庭科を女子のみ必修、男子は体育という教育過程を定めた。家庭科の女子のみの必修によって保育学習は女子のみと位置付けられ将来母親になるための教育という意味合いが一層強くなった。一方で男子に対する保育の教育は学校教育や社会教育においてもほとんどされなかった。

経済の高度成長により物的に豊かな社会が実現される中で、校内暴力・いじめ・家庭内暴力などが社会問題化し「家庭の教育力の低下」が問題視されるようになった。家庭科の男女共修は「女子差別撤廃条約」の批准のためもあったが、このような状況下で男女とも「親になるための教育」の充実という意味合いもあった。1989年告示の学習指導要領では、中学校における技術・家庭科において「木材加工・電気・家庭生活・食物」が男女とも必修となった。保育は選択となったが、「家庭生活」という新領域の中で「家族の機能」や「家族関係」の内容は盛り込まれた。選択教科中学校「保育」では、「幼児の心身の発達について」「幼児の生活について」「幼児の発達と環境との関係」といった幼児期の内容が主になっている。高等学校では「家庭一般」、「生活技術」「生活一般」のうちから、どれか1つを選んで履修することになった。そしてどの科目を履修しても保育に関する内容を履修することになった。例えば「家庭一般」を学習する場合

- ・ 乳幼児の保育と親の役割
 - ア 青年期の生き方と結婚
 - イ 母性の健康と生命の尊重
 - ウ 乳幼児の保育
 - エ 子どもの人間形成と親の役割

というように人間の発達段階と保育学習との関連づけとなっている。しかしその内容は生徒が「子どもを育てるという親役割の取得」というところに焦点が置かれ将来における家族

役割学習の先取りといった意味合いが強い。家族が多様化するに従って結婚や出産といったライフコースをを選ばない学生にとっては魅力が少ないという批判もよせられた。

3. 中央審議会答申と報告に見る異世代交流体験学習の位置付け

平成10年6月に出された中央審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機―」によると下記（抜粋）のように少子化に対する対策として乳幼児との交流体験学習を提案している。

第3章 地域社会の力を生かそう

(1) 地域で子育てを支援しよう

(e) 中・高生がもっと乳幼児と触れ合う機会をつくろう

今日、子どもに対する愛情を欠いている親や、親になることの意味や責任を十分に自覚しない親もみられる。特に、子どもへの愛情を持つことは、子育ての基本であるが、子ども好きではない母親が相当いることが懸念されている。その背景の1つには、親の子ども時代における乳幼児との関わりの問題があると指摘される。子ども時代に乳幼児と触れ合う機会の多かった者は、子どもも好きになる傾向がみられるという。現在の子どもたちに目を向けると、少子化によって兄弟姉妹の数が減少する中、新生児の誕生から乳幼児を育てる親の姿を見る機会や、自分が乳幼児を世話したり、触れ合う体験が少なくなってしまうている。学校における家庭科教育で親として大切なことを子どもたちに教えることは大切であるが、こうした問題については教室の中で知識を教えるだけでは十分でない。子どもたち、特に多感な時期の中・高校生が実際に乳幼児と触れ合い、遊び、さらに進んで世話をするといった体験を意図的に与えていくことが必要である。このため、幼稚園、保育園、市町村保険センター、保健所、乳児院において、中・高生が体験学習やボランティア活動を行う機会が拡大するよう、地域における関係者の努力をお願いしたい。また、高等学校では、それらの体験活動を積極的に学校の単位として認定することも考えてほしい。

この答申を受けた平成12年4月の中央審議会報告「少子化と教育について」においては、下記（抜粋）のように体験学習の対象範囲をさらに幼稚園・小学校教育にも広げてその重要性を説いている。

第4章教育の面から少子化に対応するための具体策

第2節 学校教育の役割と具体策

1. 幼稚園教育

幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なものである。また小学校段階以降の生活や学習の基盤の育成につながることもにも配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、基本的な生活習慣の形成、定着、道徳性の芽生え、創造的な思考や主体的な生活態度の基礎などを育てることが重要である。

また、近年、地域において一緒に遊ぶことのできる子どもの減少、親の過保護や過干渉、育児不安の問題が指摘されているとともに、女性の社会進出が進むなど幼児を取り巻く状況が変化している中で、幼稚園において計画的に構成された環境の下での集団生活を経験することは、幼児の成長にとって大きな意義を持つものである。特に、幼児期からの「心の教育」の重要性が指摘されている中で、幼児の遊びや様々な体験活動の充実が重要となる。

さらに少子化の要因の一つとして挙げられる、子どもを産み育てることへの不安や負担感の解消に資する観点からも、地域の実情に応じて、満3歳に達した時点での幼児教育のセンターとしての機能を活用した子育て支援活動を推進したりすることが重要である。併せて幼稚園においても、地域の異年齢、異世代との交流に積極的に取り組む体制の充実が求められる。

これらの点を踏まえ、幼児教育の専門施設である幼稚園を中核に、家庭、地域社会における幼児の教育をも視野に入れて、幼児教育全体についての施策を総合的に展開することが、少子化への対応の観点からも効果的であると考えられる。この場合、施策の展開に当たっては、幼稚園と小学校との連携・接続の充実を図るとともに、幼稚園と3歳から5歳までの幼児の約3割が入所している保育所とは、子育て支援の観点から類似した機能が求められるを踏まえ、両施設の連携を一層図ることが重要である。

2. 小学校以降の学校教育

少子化への対応の観点からは、学校教育において、今後の社会の方向を見通し、男女の平等に関する学習を推進するとともに、家族、社会の一員として、特に将来の親として必要な基礎・基本を習得できるよう、子育ての意義やあり方、家庭を持つことの重要性について理解が深められるようにすることが重要である。

家庭の在り方を考え、家庭生活は男女協力して築くものであることや子どもの成長発達に果たす親の役割などについて理解を深める学習は、従前から「家庭科」、

「技術・家庭科」がその中心的役割を担っている。特に、高等学校段階においては、平成6年度から「家庭科」が男女必修となりすべての生徒が、男女が互いに協力して家庭を築き、子どもを産み育てることの意義などを学習できるようになっている。「家庭科」、「技術・家庭科」におけるこれらの学習を今後一層充実するためには、すべての高等学校で保育体験学習を推進するなど、幼稚園、保育所、児童館などでの保育体験学習を充実するとともに、乳幼児を持つ地域の人々を学校に招いて具体的・実地的な授業を行うなどの指導法の工夫・改善が必要である。

こうした教育を受けた世代が将来社会を担い、男女が共同して安心して子どもを産み育てることができるような社会が実現されることを期待したい。

また、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間などを活用して、子育てを含めて生き方や将来設計を考えたり、子育ての体験学習を行ったりするとともに、「社会科」、「公民科」における家族や少子化高齢社会に関する学習、「体育科」、「保健体育科」における心身の発育・発達や性に関する学習等、関連する教科等を含めたカリキュラム全体の中で、少子高齢社会の問題を児童・生徒が考えられるよう工夫が必要である。その際、例えば、各学校において、子育ての大切さ、親の役割、更には地域の一員として近隣の子どもとのかかわり方について考えさせる「子育て理解教育」という視点を持って、これらの学習を教育過程全体の中で適切に位置付け、教育活動の展開を図ることが求められる。また、その実践に当たっては、学校内の授業だけでなく、地域における子育て活動の取り組みと連携して推進することが重要である。

さらに、教育にかかる心理的負担を軽減するためには、子どもたちが伸び伸び育つ教育環境の実現を図ることが重要となる。そのため、一人一人の子どもたちに「生きる力」をはぐくむことをねらいとした新学習指導要領等の趣旨の実現を図るとともに、個性を伸ばし多様な選択ができる学校制度の実現など、教育制度の改革と教育条件の整備に積極的に取り組む必要がある。

とりわけ、近年、いじめ、不登校、いわゆる「学級崩壊」の問題などにより親の不安が大きくなっており、学校においてこれらの問題に適切に対応することが結果として少子化への対応策になるとの指摘もある。子どもたちの心の問題の多様化・複雑化という状況も踏まえ、スクールカウンセラーなどによる教育相談体制の充実や学級運営の改善等を図る必要がある。

少子化の進行とともに、子ども同士の切磋琢磨の機会の減少や地域での異年齢集団による活動の機会が減少している。このため、特別活動や総合的な学習の時間を活用した工夫などによる異学年交流、学校間交流の開放、余裕教室の有効活用を行うことが重要である。

以上のように、幼稚園時代からの幼稚園や保育所を中心とした地域の異年齢交流や異世代交流に積極的に取り組む体制の充実と小学校からの「子育て理解教育」の視点の導入、高等学校段階における「保育体験実習」の推進が積極的に図られている。その背景としてもはや地域の自然紐帯で結ばれた子ども集団が機能不全に陥っていることを認識し、選択的にその機会を提供しようとする試みがみられる。このような中央審議会答申と報告から1999年3月改訂の新学習指導要領では高等学校「保育学習」は次のようなカリキュラムとして位置付けられている。

高等学校では「家庭基礎」、「家庭総合」、「生活技術」3科目構成となり主に「家庭基礎」及び「家庭総合」で「保育学習」が重点的にとり入れられた。2単位となった「家庭基礎」は今回の新科目であるが改訂の趣旨でも述べられているように少子高齢化時代を意識した内容で人の一生と家族福祉、家族の生活と健康、消費生活と環境などのカリキュラムで構成されている。「保育学習」は乳幼児の発達と保育・福祉という項目となり乳幼児の心身の発達と生活、親の役割と保育について重点を置くこととしながら、今回の改訂では子どもの発達を社会全体で支える児童福祉の理念や子育て支援策のように社会の保育に果たす役割についても学ぶ点が増えられた。また4単位である「家庭総合」では、生活に必要な知識と技術を習得させ、生活課題を主体的に解決できるようにすることに重点を置き、子どもの発達と保育、福祉、高齢者の生活と福祉、生活の科学と文化の内容を充実させた。「家庭総合」における「保育学習」は、子どもの発達、親の役割と保育、子どもの福祉の3項目となり特に子どもの福祉では児童福祉の理念の理解と、子どもを取り巻く環境の変化と課題を考えさせる項目となっている。「家庭基礎」と「家庭総合」では「保育学習」の内容の構成およびその取り扱いにおいて学校や地域の実態に応じて、学校家庭クラブ活動との関連を図り、幼稚園や保育所などの乳幼児、近隣の小学校の低学年の児童との触れ合いや交流の機会を持つことが奨励されている。

4. 本学における家族関係学演習における保育体験実習の意義

4-1 事前学習

第一学年時、必修である生活経営でライフプランを作成する演習を行う。多様なライフスタイルを紹介し、自分自身の主体的な選択によってライフイベントを選び取り意思決定できる力をつける。その際自分自身のライフコースのタイミングと家族のライフコースとの調整をはかり、物的資源、人的資源の動員計画にも目配りをさせた。

家族関係学演習では、家族の繋がりを最初に理解するためにファミリーツリーを作成することを課している。ファミリーツリー作成段階において自分自身の認識する親族の範囲を知ることになるが、ほとんどの学生のファミリーツリーは同居する家族からあまり広がりを見せなく、いとこ関係では自分自身と同年齢のいとこの名前がわずかにでてくるのみ

である。近隣関係における異年齢交流ばかりか親族関係における異年齢交流も経験が少なくなりつつあることが見てとれた。

次に乳幼児の心身の発達を理解する導入演習として、遊びがその発達にどのように影響を与えているかを自分自身の遊びを振り返りながらライフヒストリーを振り返る作業を試みた。現在の子どもの遊びとの比較を試みさせたが、多くの学生にとって現在の子どもの遊びについての情報は不足していた。

乳幼児の発達段階に関する理論の紹介し、現代の親子関係を理解するために統計資料を用いて現代家族が置かれている社会的、経済的状況を把握させた。さらに実習先の保育園についての制度上の位置付け、幼稚園との違い、一日の保育計画の流れについて説明をした。

4-2 保育体験実習の概要

平成12年6月13日及び20日13時30分～14時30分にかけてのみ保育園にて家族関係学演習履修者2年生が各日20名づつ実習を行った。保育園児の年齢は5歳児・6歳児達であった。6月13日はくもりのち雨、6月20日は晴れであった。実習の直後実習記録を記入させたが、実習記録から下記のような所見が得られた。

4-3 体験実習における遊びの概要

保育園児と学生が共に遊んだ遊びは戸外の遊びに集中している。6月13日は雨が途中から降り出したにもかかわらず外で園児と学生が遊ぶ姿が多くみられた。ボール遊びが一番多く(20名)、次に追いかけてこ(13名)、土遊び(10名)、砂遊び(9名)など戸外遊びがほとんどを占め、またおんぶ(5名)などスキンシップをする者も多数みられた。縄跳び(5名)やオルガン(4名)、絵本(5名)など遊具を使った遊びも多々みられたが、体と体をつつけあって遊ぶ方が園児に受け入れられていたこともあって戸外遊びに集中した。天候も影響していると思うが室内遊びより戸外遊びが好まれたのは、園児の運動量にあわせて遊び空間が自由に広がる戸外遊びが好まれたと思われる。

4-4 遊んだ人数・性別

『5人から6人と遊んだ』が21人と最も多くついで『10人以上』が4人であった。性別では女兒より男児と良く遊んでいる。学生は女性であったので、同性と遊ぶ方が多いと予想したが、男児の方が多かった。

4-5 遊びの男女差

第一学年時、『家族とジェンダー』の授業で幼児から遊びに性差がみられること、そしてその差は社会化の影響でもあることを学んできたが、実際に保育園での実習で確認するこ

とになった。

男の子の方が『活発で走り回る遊びが多い』と答えた者が20名と最も多く、男の子は戸外で場所を常に移動して遊ぶ傾向があると分析している。また女の子は、絵本遊びをする者が多く（6名）、『定位置で決まった相手と集団でかたまって遊ぶ』と答えた者（6名）もいるように、遊びの種類だけでなく遊び方にも性差があることに気付いている。学生は『女の子は男の子に比べておませである』とか、女兒の方から学生に遊びの概要を語ってくれたり教えてくれたりした経験から、男児に比して言葉の量が多いと観察している。

4-6 コミュニケーションの手段

園児と学生はすぐに遊びに入ることができたわけではなかった。初めて会った学生に園児がとったコミュニケーションの手段の多くは非言語的コミュニケーションすなわちボディランゲージが多くみられ、女兒よりも男児の方にその傾向が強いことを報告している。同年齢集団で生活していた学生にとっては、コミュニケーションのきっかけがつかめず最初の内は見ているだけという者もいたが、園児からの働きかけで徐々に遊びの輪の中に入りこまれている。

『抱きつく（8名）』『たたく（7名）』『手をつなぐ（5名）』『おんぶをせがむ（3名）』『かまってほしくて近づく（4名）』『行きたい所へ手をひっぱる（5名）』『服をひっぱって自分の方へ顔を向かせる（1名）』など、日常経験しないような表現方法に最初とまどっていた学生も多かった。

- ・腕をつかまれてびっくりした。私の気を引こうとしていたのだと思う。
- ・けられたり、ペットボトルでたたいてくる子もいたが、「きてくれてありがとう」と言われてうれしかった。
- ・男の子は相手をしてほしいからボールを投げたり、たたいてきたりしてコミュニケーションをとる。
- ・女の子は抱きついてきたり、手をつないだりして甘えてきた。
- ・初めはボールとか投げてきて気をひこうとしていたが、だんだん慣れてきて話をしてくれるようになった。

学生の多くは園児の行動の背景に彼ら独自の理由があることに気付いている。学生の一人は園児の『たたく』と言った表現の裏に『これまで自分が相手をしていたのに、離れて行くと相手にしてほしくてたたいてくる』と解釈を加えているし、また帰る時間が近づくと『わざと手をギュッとつないでむくれる』とか『靴を隠しているのは帰したくないのだと思う』というように、その行為の裏に隠された園児の気持ちを推し量っている。しかしその荒荒しい表現手段に対して、しかも親や先生でもない年長者としての自分が「しつけ手」としてどのような行動をとったらいいのか思い悩む姿もみられる。

- ・自分の身内の子どもではないので、どこまで許せたりどこまで怒っていいのかわからなくなった。

保育実習としてたった1時間だけの触れ合いの中で学生自身がどのような立場でコミュニケーションをとっていいのか判断に困るのは当然のことである。が、園児の側からすると学生を『先生』としてとらえている者もいる。

- ・先生でもないのに、『先生』と呼ばれてうれしいような恥ずかしいような気持ちだった。
- ・初めはなんだかなじめなかったけど、時間がたつとみんなが『先生』と言ってよってきて一緒に遊んだ。

学生にとっては、兄弟、親戚の子といった地位関係を基に異年齢の子どもたちと接することはあっても、これまでの生活経験の中で血縁を離れた地縁や選択的な子ども会のような組織で子どもたちに接した経験が少ないのでこのようにとまどいが生じるのではないだろうか。コミュニティーの一員としての役割をこれまで経験したことがなかったということもこの戸惑いの1つの要因であると推測できる。

4-7 事後の感想

この実習に不安をもって望んだ者も、実習を楽しみにしていた学生も同様に実習に関する評価は高い。彼らの感想で最も多かったのは『保育園の先生はたいへんだ (20名)』という感想だった。また『子どもの活発さについていけなくて疲れた (6名)』という回答も多かった。2、3人の子どもと遊んだ経験があってもこれだけ多くの子どもと遊ぶのは初めてという学生が多かったので、緊張もしていただろうし体を動かす遊びに慣れてないこともあっただろう。しかし学生達に地域で異年齢の集団の中で遊んだ経験がなかったことも多分に影響している。

- ・子どもたちは疲れな (4名)。
- ・子どもは少し苦手な方だったので不安だったそしてどんな遊びをしてよいかわからなかったが、向こうの方から呼びかけてくれたので楽しかった (5名)。
- ・子どもたちと遊ぶのは、大変そうだったと思っていたが、意外と溶け込めて一緒に遊んで楽しめた。
- ・行く前はめんどくさいと思ったが、子どもを遊んでみると無邪気で少し生意気なところもあってかわいらしかった。
- ・弟と妹がいるので大丈夫かなと思っていたけど、意外と大変だった。
- ・親戚に5歳くらいの子がいて一緒に遊んでいるが、こんなに大勢で遊んだのは初めてであった。
- ・子どもが好きだが、保育園実習後は体力的にも精神的にも疲れた。しかし子ども

と触れ合うのは楽しかった。

- ・愛情表現の下手な子ども達がとてもかわいらしく思えた。
- ・飽きないのかと思うくらい同じことの繰り返しで私はまいった。
- ・実習してわかったのは、甘え上手な子と下手な子がいることだった。楽しかった。
- ・すごく懐かしかく思って楽しかった。たたかれたりしたれど、自分もこのようだったと思い、また遊びたいと思った。

多くの学生は、この体験実習に肯定的評価をしている。学生の中には人間として自分がここまで発達してきた過程を振り返って、園児の行動に共感し解釈を加えている。保育体験実習を、子育てのための教育、家庭を形成するための教育と狭義にとらえれば、子どもを持たない学生や結婚したくない学生にとって興味がもたれないのではないかという指摘がある。筆者は「進路選択は多様であって個人の主体的な選択にまかされているということが前提である」と考える。保育体験実習をすることによって『少子化』や『非婚化』に歯止めをかけて結婚・子育てという標準的ライフコースを推奨するわけではない。

今回の保育体験実習の意義は、第1に『現在のライフステージに立つ自分の在り方をしっかり意識させ、将来の生活設計の基盤とする』ことにある。これまでの自分がいかにまわりの大人、親族や地域社会の人達にかかわって成長してきたかを考えることにある。そして人間として発達するためにはどのような環境でどのような人間関係が結ばれてきたかを理解しなければ、自分自身のこれからのライフコースを意思決定する力も育たない。家族としての関わり、同年齢の友達との関わりについては普段学生は考える機会も多い。携帯電話の普及した今日では、コミュニケーションもメールや電話1つで簡単にとれる。しかし異世代の人達や自分自身とは日常接触のない人達へのコミュニケーションについては苦手意識を持つ者も多いことがこの感想から見てとれる。そしてそうした人達の中にはいわゆる社会的弱者と呼ばれる子どもや高齢者・障がい者といった人達もいる。今回の保育体験実習で学生達が園児達とのコミュニケーションから読み取った様々なサインの解釈は学生達のこのような人々に対するコミュニケーション能力を高めるばかりか、人間関係能力をも高めると予測される。

第2に『家庭や学校といった限定された生活空間を超えて地域や自主的活動グループの中で自分自身を成長させる』という点にも保育体験実習の意義はある。学生達のこれまでの生活経験では、自分より年上の人に囲まれて暮らし、それらの人達から比較的明確な役割期待をよせられその期待に対応する役割行動もはっきりしたものであった。家庭においては自分より先に人生経験を積んだ人達という父や母という明確な役割モデルがあった。また学校においても校則のような役割規範が明示され、常に期待される学生像が明確であった。すなわちいつも自分自身の社会的位置がはっきりしており、とるべき行動が顕在化していた。いわば羅針盤で示された定期航路であるライフコースを歩んできたわけである。

しかしいったんこれらの生活空間を離れて、地域社会や自主的活動グループの中で役割を果たすとすると、共に行動する人達の年齢、役割能力も異なる。明確な役割モデルもなく様々な人々の役割期待を読み取ったり、相異なる役割期待を調整することも必要になる。時には自分自身で役割を創出すべきこともある。偶然の出会いに始まり、突然の別れに終わるような予測不可能な役割行動も多い。保育体験実習の感想でもみられるように、これまで交流経験がまったくないと、コミュニケーションのとり方さえもわからないと不安になる者は多い。自分自身と異なる相手の目線でモノを考え、相手の行動に隠されたサインを読み取る能力は、等質の人々の集団の中では育ちにくい。これまで地域活動歴や自主活動歴のない学生達にとっては保育体験学習はこのような能力を養成する機会となる。

5. 今後の課題

先述したように、今日のライフコースでは兄弟数の減少や地域の自然発生的子ども組織の崩壊によって異年齢の子どもとの交流の機会が少なくなっている。保育体験学習は、学校側からこのような状況で、子育ての大切さ、親の役割、地域の一員としての近隣の子どもたちとの関わりを考えさせる『子育て理解教育』として位置づけられている。しかし保育体験学習は一時的に学習されるだけでは意味を持たない。保育体験学習がきっかけとなって、学生達が異世代交流に積極的になることが望ましい。本来なら地域における子育て活動や高齢者との交流活動などに発展していくひとつの手がかりとして保育体験学習が位置づけられるべきである。

高齢者への福祉が家族だけに背負いきれないように、子育ても閉じこもった家庭だけでは心理的負担は大きい。地域全体で子育てのネットワークを育てる「ファミリーサポート・センター」が動き出している。子育ては子どもを産んだ親だけでなく子どもを取り巻くコミュニティ全体で考えるべきではないだろうか。本学の保育体験学習が学生にとって子育てにおける選択的ネットワーク作りの最初のゲートとなることに期待している。

参考文献

- 1) 文部省「高等学校学習指導要領解説—家庭編」平成12年3月
- 2) 牧野カツコ「家庭科教育における保育の教育」『家庭科教育69巻13号』1995